

提案論文 2

子どもが認知する教科の学習目標

琉球大学教育学部 前原 武子

はじめに

子どもは、時に深刻に、「何のために勉強するのか」とか、「こんな勉強、何の役に立つのか」という疑問を発することがある。学習内容によっては、学習の達成目標が明確に理解されることもあろうが、場合によっては、学習の意味づけが教師による指導目標とは異質なものになっていることもあろう。学習目標の認知が動機づけに大きな影響力をもつことは、これまでの研究が強調してきたことであるが、子どもが学校で学習する各教科の学習目標をどう認知しているかは明らかにされていない。ここでは、従来の学習目標理論の枠では説明できない事実について報告する。

学習の目標に関する先行研究

これまで、子どもが認知する学習の目標は重要な動機づけ機能をもつものとして検討されてきた。研究者によって目標を説明する用語に違いはあるが、学習そのものを目的とするか、もしくは、学習をある目的のための手段とするか、そのいずれを学習者が強調するかという問題と関連して論議されてきた。たとえば、Dweck & Elliott (1983) は、2つの達成目標を提唱した。その1つは学習目標 (learning goal) であり、もう1つは遂行目標 (performance goal) である。学習目標とは、個人が自分の有能さ (competence) を伸ばすことに関心をもち、何か新しいことを理解し習得しようとする意図である。一方遂行目標は、個人が自分の有能さへの肯定的評価を得ようとしたり、否定的評価を避けようとする意図である。学習目標の下では、目下の失敗は用いた方略や技術の不適切さを意味するものであり、その改善や変更を必要とする情報として認知するので、新たな挑戦を動機づけることになる。しかし、遂行目標の下では、失敗は自分の無能さを露呈するものとして認知するので、失敗によって無力感に陥ったり、あるいは失敗する危険の低い容易な課題を選択したりする。そのように、学習目標の違いは、困難な課題への挑戦を試み、失敗しても挫折せず、有効な手段を模索しながら努力を続けるタイプの子どもと、そうできないタイプの子どもの違いを説明することができる。

しかしながら、学習の目標に関する従来の研究は、次の2つの問題点を残している。その1つは、学校での教科の学習目標に焦点を当てていない点である。Ames & Archer (1988) は、学級の風土として子どもに認知される学習目標を習熟目標 (mastery goal) と遂行目標 (performance goal) の2つで特徴づけ、その認知の違いが異なる動機づけ機能をもつことを報告したが、教科の違いによる達成目標の違いについては関心を払っていない。もう1つは、学習の目標を単純化している点である。Nicholls を中心とする一連の研究は、課題関与と自我関与という目標の違いを強調した。Dweck らによれば、学習目標と遂行目標に分類され、Ames らによれば、習熟目標と遂行目標に分類されることになる。上淵 (1995) は、Dweck らの目標理論を検討したが、算数領域に限定したものであった。市川 (1995) は、数学教育における多様な意義を強調した。特に、① 実用志向 (仕事や生活に活かすための道具として学習する)、② 訓練志向 (他の学習に転移する能力を育てる)、③ 充実志向 (数学のおもしろさを

味わう)の3つを数学教育の目的として強調した。しかし、それらが数学教育に限定されるものなのか、数学以外の教科でどの程度目標になるのか不明である。子どもは学校で多くの教科を学習する。その異なる教科すべての目標を、習熟目標と遂行目標というような単純な図式で特徴づけていいのだろうか。

教科学習の目標

子どもの教科学習目標を明らかにしようとする時、教師の指導目標をも視野に入れて検討する必要がある。教師は、ある教科を指導するさいに、その指導の目標を設定する。1校時の、あるいは単元の、年間の、そして科目としての目標を設定する。そして、その指導の目標に子どもの学習が到達したかどうかは、教師にとって重大な関心事であろう。

はたして、どのような指導目標が設定されているのだろうか。学習指導要領の総則第1の1においては、「学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」と示されている。その理念に基づく教育の実現を目指すために、自ら学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力の育成が必要とされ、その育成が各教科学習指導の目標や内容となっている。しかしながら、その学習指導がどの程度教室でなされ、そしてどの程度の効果をあげているのか、ほとんど検討されていない。

これまでの研究は、学習到達度を基準にした評価が内発的動機づけを高めるという貴重な知見を見出した(鹿毛, 1993)ものの、その基準は、あくまで学習指導の目標であった。そこでは子どもの学習目標への関心はない。教師が意図する指導の目標は、必ずしも子どもの学習の目標と合致しているとは限らない。また、同じ教科でさえ教師が意図する目標には違いがあるかもしれない。たとえば、数学を教えるにあたって、数学の問題解決自体のおもしろさを分かってほしいという意図を強調する教師がいたり、入試の得点稼ぎを強調する教師もいるだろう。その意図の違いは、授業の過程で子どもに伝達され、あらためて子どもは数学の目標を認知することになる。教師が数学の授業で、学習の楽しみを味わってほしいと意図しても、授業中の教師行動のあり方によっては、教師の意図が子どもに伝わらないこともあり、場合によっては、数学以外の教科で学習の楽しみを味わうという意図を子どもは認知するかもしれない。

子どもが認知する教科学習の目標

われわれ(前原・平田, 未発表)は、小学校6年生62名に、有益だと思う教科をあげさせた。具体的には、自ら学ぶ意欲、思考、判断、表現、実用、訓練、充実など、これまで学習目標として記述されてきた項目を参考に29項目を用意し、それぞれ該当する教科名を3位まで記入させた。ここでは1位にあげられた教科だけを報告する。

表に示した結果をみると、役に立つ教科として国語をあげる子どもが圧倒的に多いことが分かる。特に「自分の考えを文章で表現できる力をつけるときに役に立つ」、「相手の言っていることを正しく理解するときに役に立つ」、「自分の考えをみんなの前で発表することができるために役に立つ」、「友達とうまく話しができるようになるために役に立つ」など、コミュニケーション能力の発達には国語の学習が有益であると考えられる子どもが多い。その他、「テストの文章問題を考えるときに役に立つ」、「高校や大学の試験を受けるときに大切」なども、約2/3の子どもが国語をあげた。

国語以外の教科としては、図工が、「新しいものを考えたり工夫したりするときに役に立つ」教科として7割台の子どもに指名され、社会が、「資料を調べて判断する力をつけるときに役に立つ」、「自分

外発的動機づけと内発的動機づけの間

表 教科（道徳を含む）学習の有益性認知（選択率）

大人になったときに役に立つ教科は	国語 (51.61) %
がまん強い忍耐力のある人になるために大切な教科は	体育 (43.55)
勉強する楽しみがわかるようになるために役に立つ教科は	音楽 (29.03)
良いことか悪いことかを判断する力をつけるために役に立つ教科は	国語 (41.94)
他の人と協力して頑張ることができる人になるために大切な教科は	体育 (19.35)
将来いろいろなことを自分で勉強するときに役に立つ教科は	国語 (38.70)
新しいものを考えたり工夫したりするときに役に立つ教科は	図工 (75.81)
困ったことが起こったときに、それを解決する力をつけるために役に立つ教科は	国語 (58.06)
友達とうまくはなしができるようになるために役に立つ教科は	国語 (61.29)
やさしい、思いやりのある人になるために大切な教科は	道徳 (35.48)
自分で何かを調べることができるようになるために役に立つ教科は	国語 (50.0)
テストの文章問題を考えるときに役に立つ教科は	国語 (77.42)
相手の言っていることを正しく理解するときに役に立つ教科は	国語 (67.74)
自分の考えを文章で表現できる力をつけるときに役に立つ教科は	国語 (91.94)
事故にあわないようにするために役に立つ教科は	体育 (46.76)
友達とうまくやっていくために役に立つ教科は	道徳 (33.87)
自分から進んで勉強する力をつけるのに役に立つ教科は	国語 (48.39)
資料を調べて判断する力をつけるときに役に立つ教科は	社会 (69.35)
自分の気持ちを表現できる力をつけるときに役に立つ教科は	国語 (46.77)
将来、仕事につくときに役に立つ教科は	国語 (38.71)
自分でいろいろな知識を増やすときに役に立つ教科は	社会 (62.90)
深く考える力をつけるときに役に立つ教科は	国語 (48.39)
自分の考えをみんなの前で発表することができるために役に立つ教科は	国語 (66.13)
みんなから尊敬される人になるために大切な教科は	国語 (33.87)
高校や大学の試験を受けるときに大切な教科は	国語 (67.74)
生活する上で基礎となる教科は	家庭 (46.77)
将来のことを想像するときに役に立つ教科は	国語 (27.42)
いろいろなことを理解するときに役に立つ教科は	国語 (37.10)
自分で何かを決めるときに役に立つ教科は	国語 (35.48)

でいろいろな知識を増やすときに役に立つ」として約2/3の子どもに指名された。

その他、「我慢強い忍耐力のある人になるために大切な」、「事故にあわないようにするために役に立つ」教科として体育が、やさしい、思いやりのある人になるために大切な教科として道徳が、「生活する上で基礎となる」教科として家庭科が、また「勉強する楽しみが分かるようになるために役に立つ」教科として音楽が、1位にあげられた。

これらの結果は次の2つの特徴を示している。1つは、学習の目標の多様性である。先行研究が強調したように、学習の楽しみを味わったり、将来の受験に備えるためというだけでなく、コミュニケーション能力や、忍耐力、思いやりや対人関係、基本的な生活スキルなど、社会生活上必要とされるコンピテンスを育てるために教科学習が有益であることを認識している。もう1つは、教科の違いによってその学習目標が異なることを、子どもが認知していることである。これは、いかえれば、どの教科においても学習指導目標となっているはずの思考、判断、表現等が、実際の教室においては教科によって強調される度合いに違いがあることを示している。子どもは教科によって異なる学習指導を受け、その

異なる経験をとおして各教科の特徴を把握してきたはずだ。たとえば、文章読解の授業では、登場人物や表現の仕方などをめぐって子どもの発表が促されることが多いし、社会の授業ではよく資料が使われ、体育では持久走等の忍耐力を必要とする授業内容がある。そのような各教科指導の特徴は、子どもにとって、学習目標として容易に認識されることとなろう。

今後、教科学習目標の測定方法を工夫し、さらに子どもが認知する教科別の学習目標の特徴を明らかにする必要がある。

教科学習の有益性認知と自律的動機づけ

教科によって学習の有益性が異なることを子どもが認知していた。そのことは、学習への動機づけにどのような役割をもつのだろうか。Nicholls, Patashnick, & Nolen (1985) は、高校生が学校教育の目標として富と社会的地位を強調する場合、動機づけの問題を抱えることになることを報告した。ある教科の学習も、それが何か他の役に立つとの認識から動機づけられるのであれば、それは、いかにも外発的動機づけの範疇に入りそうだ。しかしながら、たとえば、受験生が受験に役に立つ手段として特定の教科を選び、その学習を自律的に効果的に行っている様子を、単純に外発的動機づけで説明することができるだろうか。学習の有益性認知による動機づけでは、外発的動機づけと内発的動機づけの境界を明瞭化できそうにない。

有益性認知の効果は、社会化の過程で自律していく子どもの様子の中で理解した方がよさそうだ。社会化は、社会が期待する行動様式を自分の行動様式の中に取り入れる過程である。社会の期待は、多かれ、少なかれ、教師による学習指導をとおして子どもに伝達される。しかし、適応理論が強調するまでもなく、社会的基準が子どもの中に取り入れられるかどうかは、受け身的ではなく、能動的に、子ども自身の基準との間で調整される。教科指導の目標も、機械的にではなく、子ども自身の能動的な処理過程を経て学習目標となる。特に小学校の高学年以上にもなると、教科学習をとおして、それが自分にとってどんな意義をもつのか、どんな必要性があるのかといった疑問を抱き、それを解決しながら自己調整的に学習しようとする。

そこで、重要なことは、自分の特定の能力や資質を伸ばしたいという自己成長の欲求である。自己成長に動機づけられた学習は、社会の一員として、同時に個人として、自分にとって、自分の人生にとってどんな資質や能力の育成が重要な意味をもつのか、その育成のためにどんな教科をどんな方略で学習していくかなど吟味しながら自律的に進行する。そのような学習過程の1つのステップが教科の有益性認知であると思われる。今後は、教科の有益性認知から自律的に動機づけられて進行する学習過程について実証的に検討する必要がある。

引用文献

- Ames, C. & Archer, J. 1988 Achievement goals in the classroom: Student learning strategies and motivation process. *Journal of Educational Psychology*, 80, 260-267
- Dweck, C.S. & Elliott, E.S. 1983 Achievement motivation. In E.M. Hetherington (Ed.) *Socialization, personality, and social development*. New York: Wiley
- 市川伸一 1995 心理学からみた数学教育 新しい教育心理学者の会(編) 心理学者一教科教育を語る 北大路書房 (Pp. 82-93)
- 鹿毛雅治 1993 到達度評価が児童の内発的動機づけに及ぼす効果 教育心理学研究, 41, 376-377
- 前原武子・平田幹夫 1996 小学生が認知する教科の学習目標 (未発表)

外発的動機づけと内発的動機づけの間

Nicholls, J. G., Patashnick, M., & Nolen, S. B. 1985 Adolescents Theories of Education. *Journal of Educational Psychology*, vol. 77, 683-692.

上 渕 寿 1995 達成目標志向性が教室場面での問題解決に及ぼす影響 教育心理学研究, 43, 392-401.